

SF 的読み解き

子どもという風景

第一回 テレくさき初心の構造

堀内 守

1

見ること・見られること

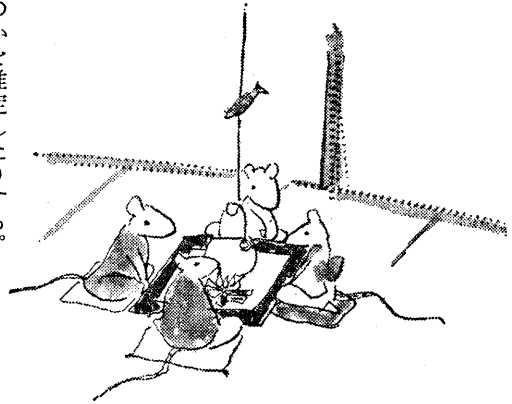
一枚の写真があったとする。

そこには何かが写っている。人物でも、建物でもかまわない。私たちは、その写真を見て、いろいろなことを読みとることができるだろう。まずはそこに写っているものや人。ついで、写真のフィルムに目を移し、この写

真がいつ頃のものかを推定したりする。

そこには直接写っていないが、写されているものを介して、間接的に見えることのできるものもある。たとえば、その写真を撮影した時のカメラの位置。それは直接には写っていないが、少し気をつけるとわかることである。もう少し慣れた人なら、その写真を撮影した人の「腕」の水準まで推定することができよう。

鏡などの場合はどうだろうか。



私たちは身のまわりに多くの鏡をもっている。手鏡、洗面所の鏡、自動車のバックミラー。通りに面した建物のガラス戸なども、ちゃんと鏡の役割を果たしてくれている。

鏡をのぞく。そこに写っているのは自分である。が、いったいどうやって、それを「自分」であると確かめられるのだろうか。向うに写っているのは鏡像である。像とこの自分とをどうやって同定（アイデンティファイ）できるのだろうか。これも面白い問題だ。

しかし、もっと面白いのは、鏡に写った自分の像を眺める私たちのまなざしである。ふつうは、ちょっとした髪型を直したり、化粧をしたりするだけであるように思えるが、はたしてそれだけだろうか。

実はこの時私たちのまなざしは分裂しているのである。少々表現はどぎつく響くかもしれないが、この・分裂“の意味は単純ではない。まず、私たちのまなざしは、“自分”とおぼしき像に向かう。それがふつうの“見る”という行為である。だが、もうひとつのまなざしは

もっと複雑である。それは次のように表現することができよう。「もし、私の顔を他の人が見たら、いまここで私が私の像を眺めているような形で他の人の目に映るだろう」ということである。私たちは、いまここにありながら、観念の上では“自分”と“他人”に分裂している。そして、このうちの後者は、私たちのまなざしに他人の目が憑り移っている状態に近いのである。

私たちは毎日鏡を見ているから、こういうことの意味の重大さに気がつかないでいる。だが、ちょっと場面を変えてみると、初めて鏡をのぞき込んだ人類の驚きはいろいろな形で残っているように思われる。

ナルキッソスの物語

ギリシャ神話に出てくるナルキッソスの物語をご存知だろうか。彼は美少年ということになっている。しかし、それまで自分の顔や姿を見たことがなかった。

ある時のこと、彼はたまたま湖をのぞき込んだ。水面に美しい姿の少年が映っていた。彼はその像（自分の像）

に恋してしまつたのである。

これを他愛もない話と軽くあしらつてはいけない。ナルキッソスは、水面に映じた像がほかならぬ自分のそれであると見分けることができなかった。そして、自分の姿に恋い焦がれ、やつれにやつれて死んでしまつた。その魂は水仙になり、いまでも池のほとりで花を咲かせる、というのである。

鉢かづき姫の物語もこれに似ている。鏡に写つた自分の顔を亡き母の顔と思ひ込んで慰められたという物語は、こっけいなようでもあり、あわれでもある。

鏡が割れると不吉であるというような見方も、像の意味づけと関係がある。

幼児が鏡を見、そこに映っている自分の像と戯れるのは大体六カ月ぐらいからであるという。他の高等哺乳動物なら、鏡に映つた像を自分のそれと同定できないので、恐怖におちいたり、鏡を割ってしまったりする。

そういう研究がある。また、ゴリラを例にしたテレビ番組もあつた。いろいろな大きさのゴリラが鏡におそるお

そる近づき、そこに写つた自分の姿を見て、あっけにとられてゐるやうに、しばらくぼんやりしていたのは同情に値する。つまり、そのゴリラの胸のうちを人間のことにばに直して表現すると、「おや、あそこにいる奴は見たことのない顔の奴だ」ということになるはずだから。

他の仲間の顔は自分の眼で見ているから見分けられる。しかし、ほかならぬ「自分」の顔をゴリラは見たことがなかつたからである。見たことがない顔。それは警戒すべき相手である。これがゴリラの反応の型であつた。

人間は、向こうに写つているのがこの自分の顔であると同定できる。そして自分の像と戯れるかのように化粧をしたり、身だしなみを整えたりする。このとき、私たちのまなざしは「自分は他の人の眼にはこのやうに映じるのだ」ということを承知している。

恋人に逢いに行く若い人は、鏡の前では一瞬、相手のまなざしを自分のまなざしに憑り移らせて自分の姿を判断する。

像との戯れ

本当はこれは大変なできごとなのである。

ふつう、人間の子どもは生後一年ぐらいで言葉をおぼえるから右のようなできごとがそこでなされているというようには見えない。あたりまえのこのように思え、何のふしぎもない自明のこのように見える。だから、ふつうは、放っておいても自然とそこまで到達できるかのように思われている。現にそう見える。しかし、少し視野を広げてみると、この短かい歳月のあいだは大変なできごとが起こっているといえるわけである。

ゴリラの場合と違って、人間の子どもは自分の鏡像と戯れる。それと遊び、やがてその像がほかならぬ自分の像であることを知っていく。この間どのくらいの高峰をよじ登るのか。進化のあとが一年という短かい時間のなかに凝縮してあらわれるといったらよいだろうか。

像やイメージと戯れることができるというのは人間の

面白い特性である。つまり、いまここに無いものを、あたかもあるかのように描き、それとかわりをもとうとし、しかも持続できるというのだから。

生命の余剰である。溢れ出るイメージ群や溢れ出る観念群を全部処理できず、時折爆発したり、動物を同じレベルでの生命の維持という段階をはるかに超えた余分なエネルギーをもて余しているのが人間である。

それはただ溢れているだけではない。それは外に向かい、あるいは内に向かう。いや、外と内という区別をも融触させてしまう。そして「人間とは何か」という問いになつて反省のきっかけとなる。

答えはたぶん出なからう。出ってしまったらつまらないのである。ひたすら向うことだけに張り、(生命の張り)を感じる。他の動物がもしことを話せたら、「やれ、やれ、人間という動物は神経質でいつも余計なことを考え、自分で自分を悩ませている」というように見えるかもしれない。

もっとも、動物がことばを話せたら、彼らも人間と同

じように「……とは何か」という問いを発し続けるであろう。そのあげく、彼らも「ノイローゼ」気味になることは確実であろう。

問題は、この「ノイローゼ」が常の態となり、うまくいけば自分の存在をかえりみるという特性になるというところにある。そのところは、古い時代からいろいろな概念で表現されてきた。「汝自身を知れ」「反省」「現存在」——いずれも単なる「ある」という次元を突破していこうとする、過剰なエネルギーのあらわれである。

それを哲学者だけの特権と見なしてはいけない。現にだれもがやっていることである。たとえば、空の雲を見る。その形は何か別のもののように見える。アイスクリームのようにも、船のようにも、その他もろもろの何かのように見える。「入道雲」という名称はこれらと同じレベルにあるといえよう。このときの「何か別のカタチに見える」ということと、「私にとって」そう見えるということがカンジンなのである。

初心に還れということ

人はよく「初心に還れ」ということばを使う。多くはそれを誤解しているようである。なぜなら、ふつうそのことばは「何かを始めたばかりの純心な心を思い出せ」くらいの意味で説かれている。どなたもそう強調されたのを記憶しておられるに違いない。ところがどうも違うようなのだ。もし、心して「初心」を丹念に洗い直していくと、「純心」などは幻であることがわかってくる。むしろ「初心」のまわりにはわけのわからぬ不安や恐れ、さらに期待などがあるかと思うと、「初心」の中心に近いところには混沌とした状態のみがあり、思い返すたびに赤面せざるをえなかったり、テレくさい思いで汗が出てくるといのが本当のところである。

これを「純心」という幻想でとどめてしまうのは、本当に「初心に還って」いないからである。また、あのテレビや赤面をふたたび味わいたくないからである。

「初心」を「純心」と置き換えてしまうのは何とか体面を保持しようとする、よそ行きの顔つき、外の眼を気に

する顔つきのあらわれである。

夏、むくむくと空に姿をあらわした雲を見て大入道に擬したこと——それをなつかしく思い出す人もいる。それはそれでよいのである。この時、その人の心は、身は、身体のリズムは緩んでいるはずである。詩的言語として「入道雲」を用い、その時の気分は宇宙のリズムと合っていたのかもしれない。けれども、別の面もある。いつまでも「入道雲」の段階でとどまっても困るのだ。そこで、よく反省してみると、「入道雲」という表現も、実はだれかが使っていたのを仕入れたにすぎなかったこともわかってくる。その人が初めて発明したのではなかった。

時がたつ。それまで「入道雲」で通じていた世界から、同じものを「積乱雲」という術語で呼ぶという約束事の世界を手に入れる。大方は、そういう世界が一举にやってくるのではなく、そういう一つ一つの単語を手がかりとしてゆっくりやってくる。

「セキランウン」。いかにも何かで武装したことばだ。何

かで化粧しているようにも見える。「入道雲」の、擬人的な印象、民俗的な匂い、神話的な響きは、「セキランウン」にはない。あたかも磨かれた概念であるかのよう。実は、それは「乱雲」「積雲」などとシリーズになっている術語なのである。

ひとたびこのことばを手に入れると、たったいままで使っていた「入道雲」がどこか稚おそなく見え、それに満足していた自分がいかにも狭い世界に安住していたかのような気分きぶんに襲われる。いいかえると、早急に古い世界から逃走したくなり、新しいピカピカの術語を使って見たくなる。カッコよく。

これも戯れあそびの一種である。戯れであるが、自作自演ではだめなのである。観客がいてくれなければならぬ。そして「ふーむ。むずかしいコトバが使えねえ」などと感あはれに入った応じ方をしてくれないと態まなにならない。あるいは観客はまだ「入道雲」などを使っている弟たちや妹たちでもよいのである。げげんそうな彼らの表情はそのまま「積乱雲」というむずかしい表現を使うことので

きるへわたし」の存在を照らし出すフットライトのようなものなだから。

かくて、「初心」の全体を調べていくと、「純心」とは逆であることがいよいよ鮮明になってくる。その正体はキザな構造と指摘してもまちがいではないようだ。

でも、だれもまわりの人はそれをキザだと断罪せず、もっと別の表現で和らげてくれるようである。「おしゃまなこと」「おお、よく使えるねえ、驚いたなあ」等々。それをおせじだと思わず、まっとうに受けとめていた自分のキザっぼさに腹が立つのはずっとあとになってからである。そのころは、もうあのおせじやお愛想を言ってくれた人もとくにそんなことのあるのを忘れていた。だからこちらも救われる。よくぞ忘れてくださったと感激してもよいくらい。

忘却という救済

以上を「子ども」の段階での一時的な夢と思ってはいけない。意外にも大のおとなの世界にもそっくりあらわ

れている。けれども、まずは忘却という恵みに感謝しておくことにしよう。

生まじめな大先生にかかると、記憶が大切ということになるが、そんなに重い荷物をかかえて汗を流して歩くのはよくない。しかも、役に立たぬ知識やしがらみを引き連れてうんうんうめいて歩くのはよくない。人間は、余分なことはさっさと忘れていく。身軽になって新しい世界に飛び込んでいく。

一例を挙げよう。近くに保育園がある。園児たちは百人ぐらいである。毎年四月、その園児たちのあいだにちょっとしたドラマが生まれる。一学年？ 進級するのでクラスの名前が変わり、胸の名札の色も変わる。

クラスの名前は野菜の名からできている。

「ニンジン」「キャベツ」「ジャガイモ」等々。これだけではどれが年上だか、どれが年下なのかわからない。何でも一時は「ダイコン」組もあったそう。しかし、母親たちの間で猛反対が起き、改名されたのだそう。

子どもたちは平気の平左だったのに、母親たちは日本

の伝統たる素朴實在論のトリコになったのだろう、あるいは、「ダイコン」によって何か別のものを連想し、その連想がおのれにはねかえり、「あら、いやな名」などということになったのかも知れない。何だか現代の呪術のよう。改名は一種のオハライだった。浄めがなされたのに等しい。

「おーい。ニンジンさんたち集まれーい」

こんな号令がきこえることもある。「キャベツさんたち早く並びなさい」などという声もきこえる。外から眺めていると、命名まことにみごとと感心するほどである。ここで三年以上過ぎていく幼児たちの日常生活はまったくにぎやかである。自由時間などには結構へなわばり争いが起こる。

「何だ、おまえニンジンじゃねえか」

「何よ、おまえなんかキャベツじゃないか」 「やい、ニンジン」

「やい、キャベツ」

「こういうわけで、時折奇妙なパラドックス（逆説）も

生じ、「おまえたちはヤサイじゃないか」という変な表現が一方の子どもたちから出されることもある。すべて、これらは当人たちの記憶に残らない、ささやかなるドラマなのである。

よく学会のシンポジウムでもこれと似た状態が生まれるから面白い。当事者たちは気がつかないのがふつうだ。気がついていたらそんなことやれっこないだろう。

三月の下旬、日本中の幼稚園でも保育園でも卒園式が催される。第一子の卒業式に立ち合う親たちは初めての経験だからいそいそとして参列する。第二子以下の場合、もうその「いそいそ」は何分の一かに減っている。まるで、第一子のときの写真がやたらに多いのに、第二子になるとガタンと減っているのに似ている。

さて、この儀式だ。何年間もお世話になってきた幼児たちはきょうで卒園。晴れやかな気分と、ちょっぴりさびしい気分。というわけで卒園式の歌などが高らかにうたわれる。ダークダックスの「思い出のアルバム」をちょっとひねった歌が圧倒的。その歌詞のなかにはまるで

幼児たちがこの園で過ごした生活のあれこれを永遠に忘れないと誓うかのような文句もある。

素朴実在論者にとっては、「永遠に忘れない」というイミの歌詞（実は歌詞そのものの引用をしたのです）が、著作権法上の手続きが面倒なので、わざと遠まわしにします）は、子どもたちの正直な気持の表明ということになるので、感きわまってはらはらと涙を出す先生がおられてもおかしくない。心清きん。

が、彼らにとっての「永遠」は、実のところ想像以上に短かい。まるでショートショート。ショート、ショーター、ショートテスト。

どのくらい？ 平均二週間である。近くの某保育園の道一つへだてたところの小学校の通用門は、保育園から五メートルぐらいしか離れていない。二週間前に卒園した幼児は、四月の初め「一年生」に変身してその門をくぐる。

保育園児のとき、横から眺めていたときの小学校と、いま生徒としてそこに入っていくときの違いは、空間的

に小学校がものすごく広い（おとなの感じ方の五倍ぐらい）と思えることと、学校が迷路のように複雑に見えるということである。すぐそばの保育園は、もう時間的にはるかかたに去った。保育園の先生から声をかけられるのを一年生は極度にきらう。はずかしいのである。同時に腹立たしいのである。そして、ちょっぴり悲しいのである。なぜなら「初心」はここでもキザなのだから。

（名古屋大学）

